

Phonemic Syllable and Stress-Timed Rhythm

辻 前 秀 雄

音素論の発達 は 自 国 語 と 他 の 特 定 の 言 語 と の 音 組 織 の 差 異 を い っ そ う 強 く 認 識 さ せ る よ う に な っ た 。 「 外 国 語 の 二 ， 三 の 著 し い 相 異 点 を の ぞ け ば ， 外 国 人 の 用 い る 音 も 彼 が 日 常 聞 き な れ て い る も の と 同 じ で あ る 。 た だ 外 国 語 に は 神 秘 な *accent* ， す な わ ち あ る 分 析 し が た い 音 声 特 性 が 音 そ の も の の 外 に あ っ て ， そ れ が そ の 言 語 に 奇 妙 な *air* を 与 え る ， と 一 般 に 感 じ て い る 。 こ の 素 朴 な 感 じ は 大 部 分 は 錯 覚 に よ る 。」¹⁾ と *Sapir* が 言 っ て い る こ と は わ れ わ れ に と っ て 重 要 な 警 告 で あ る 。

こ の 小 論 の 試 み は 英 語 の 音 組 織 ， ひ い て は *Fries* の い う ‘*stream of speech*’ (*Teaching*, ch. II) の 中 で ， わ れ わ れ の 自 国 語 と 最 も 異 質 で あ り ， 認 知 あ る い は 発 話 の 領 域 で 最 も 障 害 と な る 要 素 は 何 か と い う 基 本 的 な も の に 結 び つ く 。 音 節 を 基 盤 と す る こ と に 問 題 は あ る 。 し か し ， 音 節 と い う も の が 重 要 な 手 が か り で あ り ， 少 な く と も 一 つ の 単 位 素 で あ る と 前 提 し て お く こ と は で き よ う 。 表 題 は こ の 意 味 で 研 究 の 出 発 点 と 最 終 目 標 を 示 し て い る 。 お そ ら く そ の 全 体 を お お う こ と は で き な い が ， 言 語 と は 何 か の 問 題 に 連 な っ て い き た い と 考 え る 。

1) See *Sapir, Language, An Introduction to the Study of Speech* (Harcourt, Brace, New York, 1949) pp.42~43. 以下参考書目は巻末に付記した略号を用いる。

1

音節 **syllable** とは何かという問題に関して例えば英語学辞典を開いただけでもとまどいを生ずる。強勢説、「きこえ」説、呼気通路の開閉説、呼気流出量の変化説、喉頭の緊張弛緩説、等々。Jespersen 等の「きこえ」を主とし、強勢を従とする説のごときが比較的当を得たものであろう、ということで、彼の単音の「きこえ」**Schallfüre (sonority)** の8度説が図示されている。

太田朗氏は「米語音素論」(p.32)で Pike による音声的音節の定義、**‘units of one or more segments during which there is a single chest pulse and a single peak of sonority or prominence’** (*Phonemics*, p. 90; p. 246) から「きこえ」という聴覚的なものと、「胸はく」という調音的なもの、の両者を取り上げている。

Webster 辞典の発音の手引は Kenyon によるものであるが、音節に関する二学説を紹介して、一方を **sonority** 説、他を **pulse** 説としている。英語学辞典でも前述のごとく Jespersen 等の「きこえ」を主とし、強勢を従とする説のごときが比較的当を得たものであろうとしている。

そこで音節を考えるのにこの **sonority** 説を一応の手がかりとして進めていきたい。音素的音節というとき当然ふれなければならないのは音素 **phoneme** であるが、このことに関しては太田氏の「米語音素論」で詳細に論義されている。ここでは、たとえば Fries や Pike のいう示差的音特徴 **‘distinctive sound features’** あるいは、有意的な音 **‘significant sounds’** という概念で一般的にとらえ、さらにはまた、Jones の **‘a family of sounds consisting of an important sound of the language (generally the most frequent used member of that family)’** (*Outline*, p.49) にもとづいて、現在特定の国語で同一音として抽象された単音群と考えておく。「示差的」ないしは「有意的」ということが何を意味するかということも問題となるが、

ここではしばらくおくこととする。

要するに音素を Pike (*Phoneme*, p.89) のいうように‘the smallest structural unit’ と位置づける。しかしながら最小単位としての音素は必ずしも実際の発話においてわれわれが認知し得る音単位ではない。それは語におけるアルファベットの役割りと同一視できないかも知れないが、談話の流れの中でわれわれが認知し得る最小音単位は音素配列によって構成された音素的音節であると考えたい。音素をこの意味でいわば音節構成単位と格づけしておくこととする。

英語の音韻を記述するための分析資料として、ここでは英語の本来語を抽出することにした。General American あるいは Southern English の生き生きとした発話で、ことばの中核をなしているものはやはり民族伝承の本来語であろうと考えたからである。¹⁾

先にのべたように音素は音韻論の極めて重要な部門であるが、ここでは音節構成要素として、その配列を中心に略記するにとどめたい。Fries によれば米語の音素は母音11, 二重母音3, 子音24, 計38となっている。今後の説明の便宜上、この Fries の音素分析を基本にして、Kenyon, Pike ならびに、Jones のそれと母音の表記対照をしておきたい。なお/ər/ /eər/ 等の音に関しては問題もあり、後に述べる機会があるので繁雑さを避けるため、ここでは省略することとした。

Fries	i	ɪ	e	ɛ	æ	ʊ	u	ɔ	ə	ə	aɪ	au	ɔɪ	
Kenyon	i	ɪ	e	ɛ	æ	ʊ	u	ɔ	ʌ	ə	aɪ	au	ɔɪ	
Pike	i	ɪ	e	ɛ	æ	ʊ	u	ɔ	ə	ə	a ⁱ	a ^u	ɔ ⁱ	
Jones	i:	ɪ	eɪ	e	æ	ʊ	u:	ou	ɔ:	ʌ	ə	aɪ	au	ɔɪ

1) 抽出の便法として Skeat 語源辞典のコンサイス版を用いた。抽出語数は約2,600語, うち単音節語が約1,600語, 二音節以上が820語である。純粹に Anglo-Saxon 由来のものを選ぶよう心掛けたが, 語源に疑義のある語も多く, 数的な正確さは期しがたいが, 記述分析のデータとして役立ったつもりである。

子音は Fries では次の24音である。¹⁾

p b m f v w t d n s z š ž č j θ ð k g ŋ h y l r

例語は省略するが英語の音節構成の典型はCVC型²⁾、いわゆる閉音節型である。英語では語頭に来る単子音のうち、/ŋ/ /ž/は慣習的に起らない。また *zeal* (<F) における/z/も本来語にはないので語頭単子音は21音である。

CVC型の前後のCには英語では相関性がないので、語尾のCについてみると、これも慣習的に/r/³⁾/h//w//j/が起らず、*rouge* (<F) の/ž/も本来語にないので19音である。

このようにしてCVCを単子音+母音+単子音と配列して生ずる最も基本類型の語は本来語中 *bad, net, fun, that, ship, till, watch*, 等約700語あり、単音節語の40%を占めている。

これらのCVC型とともに英語にも少数のV型、CV型、VC型が見られる。これらの比率をCVC型とくらべてみると、

V	0.7%	VC	4.2%
CV	13.9%	CVC	81.2%

であった。

CVC型で英語の特色を発揮するものは **consonant cluster** の配列である。今これをC₁VC₂として、まず C₁ cluster を考えてみる。Fries によると語頭または母音の前で起る子音連結は39種である。そのうち/yu/音は英米で相異があるので別にして、⁴⁾ 本来語の一音節語 でこれらの語頭 cluster

-
- 1) 表記順も Fries (*Teaching*, pp.11~12) のままとした。š, ž, č, j はそれぞれ Jones の ʃ, ʒ, tʃ, dʒ に相当する。
 - 2) C=Consonant V=Vowel この CVC の音素配列は日本語の CV 型(開音節)と顕著な相異を示している。
 - 3) /r/は米語/or/で示される半母音でなく *red* にみられる fricative /r/である。
 - 4) /fy/ /ky/ /my/等については Fries で6, 方言として7, 計13種あがっているが、本来語で起りうるものは、CV 型 *few, mew, new, dew, lew, spew*, CVC 型で *newt* くらいであった。

をもたないものは /sk/ /sf/ /skr/ の三つであった。¹⁾

次に語尾の子音連結ははるかに多く、Fries は屈折語尾を除いても65の単一形態素をあげている。この内、/rb/ /rt/ /rst/などは、米音の特色でもあり、後にふれることもあるので除いて、本来語をあてはめてみると、/kt/ /ls/ /lj/ /lb/ /lš/ /mf/ /ps/ /nz/ /ln/ /mpt/ /gks/ などに空白を生じたが、すべてラテン系であった。これらを除いて本来語の語尾子音連結は35種であった。

以上のCVC型の variants を要約すると、¹⁾

CVC	<i>bag, ham, wish, etc.</i>	43.7%
CCVC	<i>stead, cliff, swan, etc.</i>	21.5%
CVCC	<i>holt, shelve, guilt, etc.</i>	11.1%
CCVCC	<i>clasp, crimp, blind, etc.</i>	3.0%
CCCVC	<i>stream, spring, sprash, etc.</i>	1.3%
CVCCC	<i>length, midst, next, sixth</i>	} 0.6%
CCCVC	<i>strand</i>	
CCVCCC	<i>glimpse, twelfth</i>	
CCCVCCC	<i>strength</i>	

さらにこれらに屈折語尾が付加されれば、*breadths, twelfths, strengths* など複雑な子音連結が構成されるであろう。

2

英語の音節構成単位としての音素について、主としてその配列の中から特

-
- 1) /sk/には *scale, school, scope* などがあげられるがすべてラテン系である。
 /skr/には *scream, screen, screech*, があるが Scandinavian または French である。
 /sf/には *sphere, sphinx* があるが Gk. 出身である。
- 2) %は前掲の CVC 型単音節81.2%の内訳である。なお、例語中 *length, strength* の発音は [lenkθ] [strenkθ] によった。

色を見てきた。C Vを主体とする日本語では音節は総数にしても120種くらいといわれているが、子音連結にいくつかの法則性が認められるとしても、英語の音素的音節は少なく見積っても数千にのぼるであろう。¹⁾

さて、このように構成された ‘unit’ を一応 *speech* の最小単位と仮定しよう。それがただ /b/ + /æ/ + /g/ の単音の集合体ではなく、/bæg/ として全体のリズムの中で明瞭に識別し得る根拠はどこにあるのか。音節は英語の全体の音組織の中でどのような位置を確保しているのか、という問題になってくる。

ここで前にあげた *sonority* 説と *pulse (pressure)* 説を介入させたいのであるが、後者については端的にいうと音節間の境界に関する分野で重要となってくるので次章で触れることにする。

音節というものを「きこえ」*sonority* によって解明しようとする立場をここではまず Jones²⁾ に求めてみよう。彼によれば、*sonority* とは各音が同じ長さ、強さ、高さで発せられたとき、聞えうる、あるいは音を運びうる距離の相対的な度合いである。[a] は同じ条件で発せられる [p] や [f] よりも「きこえ」が大である。これらの「きこえ」あるいは ‘*carrying power*’ はそれらの音固有の音質 *quality (timbre)* による。つまり *sonority* は可聴度 ‘*degree of audibility*’ というべく、それぞれの単音の音質の差異による。

Bloomfield (*Language*, p.120) の具体的な度数分布を要約しながら Jespersen と対比させてみると、前者が ‘*spirant*’ と ‘*stop*’ 音に差をつけた以

1) 太田朗「米語音素論」では法則性（ないしは英語の慣習）によって子音連結を起さないものを「型の穴」, /fɛt/ のように英国人が見ても起り得ると感じられるものを「偶然の穴」としてこの間のことを詳述されている。Sapir (*Language*, p.54) にもドイツ語の *zeit* におけるような /ts/ の語頭子音が起らないことを例にあげて、ある音は特別の位置、または発音の特別の環境にのみ起ると言っている。

2) *Outline*, §100, 101. ちなみに Jones, *Phoneme* では ‘*sonority*’ という語は見えず ‘*the loudness or carrying power*’ (§427) となっている。

外は大体同一である。図示は省略するが、前者は9段階くらいに細分したものを大きく4つにまとめ、後者の順とは逆に 1. vowel 2. nasal, trill, lateral 3. voiced consonant 4. unvoiced consonant と分類し、実際例として次の文を示している。

Jack caught a red bird.

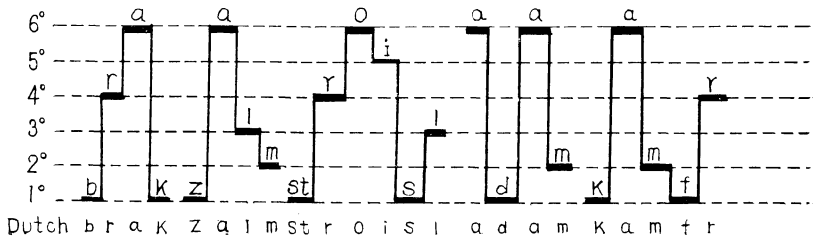
[dʒɛk kɔ:t ə red bɜ:d]

314 414 1 213 313

Kruisinga (*Handbook*, p.69) も音節中の連続する音がわれわれの ‘sense of hearing’ を打つ力を sonority として、次の6度に分類している。

1. consonants
2. nasals
3. side-sounds
4. trilled *r*
5. high vowels
6. low vowels

彼の場合の表示が一番分かりやすいと思われるので Dutch についてであるが、代表的にここに示すこととする。この図によって、連続音の波の中で、音の山と谷が生じ、この谷が境界となって切れ目ができる。この谷を境にして前後に切れ目のある連音が音節ということになるわけである。

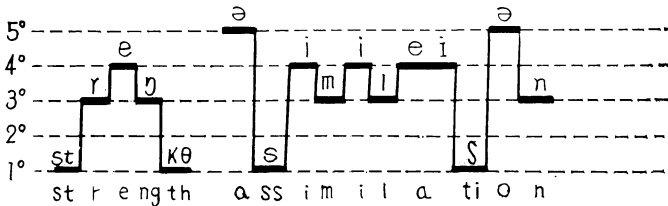


Jones (*Outline*, §100) にあっては母音と子音の区別は恣意的な生理学的区別ではなく、実際に聴覚的事項に属し、同じ長さ、強さ、高さで発せられるとき聞きうる最高距離の度合いであるとする。Jones の場合も大たい同じ

であるが, Kruisinga に合せて表記すると,

1. voiceless consonants
2. voiced consonants
3. l-sounds & voiced nasal consonants
4. 'close' vowels
5. 'open' vowels

となり, 図示はないが, 例えば単音節で最も **consonant cluster** の多い語 *strength* と多音節語 *as·sim·i·la·tion*¹⁾ をこの5段階で示してみると次のようになる。



前者は /e/ のところが山となり対称的な子音の傾斜を作っている単音節である。後者は /ə//i//i//ei//ə/ と大小5つの山が生じ, 5つの音節を形成している。

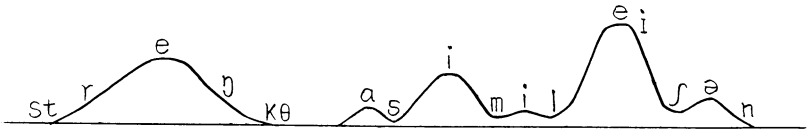
音節とはこの山 'peak' と谷 'trough' とより成り, この谷を境として前後に区切り目のある連音であることは前に述べた。そこで出てくる問題は,

- (1) 「谷を境にして前後の区切り目」という場合, その境は前後(あるいは中)のどちらにつくのか。
- (2) *assimilation* の場合, 4°, 5°の山が5つある。しかし実際にはこのように聞こえない。
- (3) 「切れ目がある」というのはこのグラフは示しているが, 実際の発話

1) *assimilation* (<L) は本来語ではないが, 音節の切れ目, 二重母音, さらに後に述べる成節子音などにも関連するので例に用いた。

においてはせいぜい誇張しても、「切れ目があるように感ぜられる」の
 であって、決して *as·sim·i·la·tion* と意識してとらえられない。

(1), (3) の問題については ‘pressure’ を持ち出さねばならない時点となるが、先づ (2) の **peak** を考えよう。これは単音一つ一つを「強さ、長さ、高さを同一にして」という条件が付加されている故であって、実際の山は次のようにあらわれよう。



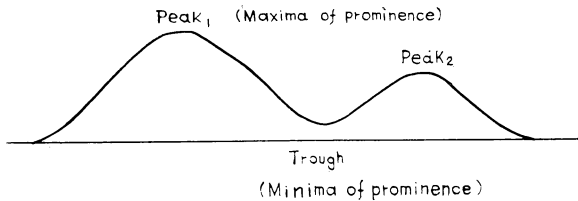
これが Jones のいう ‘prominence’ の段階となるのである。彼によれば、各単音の相対的な「きこえ」はそれぞれの音に固有な音質 **inherent quality** (**tamber**) によるものであって、連続音の相対的 **prominence** (**degree of loudness**) とは区別されねばならない。**prominence** はこの固有の音質の外に強勢 **stress**, 長さ **length**, 音調 **intonation** により、ならびにその総合により決定される。したがって「きこえ」度の大きい音でも、長さや強勢を減ずることによって **prominence** を減じ、より **consonant-like** になり、逆に強さや長さを増すことによって、「きこえ」の小さな音でも **prominence** を増すことができる。*assimilation, opportunity*¹⁾ などの波が生ずるのはこのためである。

3

英語本来語2,600を抽出したうち、1,600 (64%) の単音節語を分析しながら音節を **sonority** という立場から検討した。音連続においてはさらに多くの要素のからみ合った **prominence** を導入すべき経過を辿ってきた。

- 1) この語も本来語にはないが (<F<L) しばしば強勢で引き合いに出される語であるので例示した。

さらに二音節以上の語においては、「きこえ」によって感ぜられる切れ目、「谷」に対する解明が必要となってきた。Jones (*Outline*, §210) の用語を用いて問題点を図示すれば次のようになる。



この ‘peak’ の数が音節数であり, ‘trough’ がその切れ目である。 *letter* /letə/ は単音 *e* と *ə* の「きこえ」度, 強勢, 高さなどの要素の総合によって, **prominence** の山を形成する。この二音を成節主音 **syllabic** といこの語は二つの音節より成るとする。

したがって, 理論的には音節は一つの **prominence** の山を含む連音ということである。しかしながら実際の発話においては, この境界の谷, すなわち **minimum prominence** の正確な点が問題となることが多い。例えば, **prominence** 論者は多くの場合, 谷の底は平盤であり, 分節の点と認められる一点はないとし, また正確な分節の点¹⁾ は ‘a matter of no importance’ とかわしている。

このように, 音節存在の核である山の問題は一応 **prominence** で説明し得るとして, 音連続の切れ目の原因については **prominence** では十分解明し得ないように思われる。

Sweet (*Grammar*, §666) は ‘a single impulse of stress’ で発する連音を音節とし, ‘every fresh impulse of stress makes a new syllable’ と説明して ‘impulse’ という言葉を持出している。

1) 分節法 *syllabication* についても付言すべきであるが, これは記号標記の領域となるのでここではおくこととする。

Webster の「発音の手引き」でも「きこえ」 *relative perceptibility* としての Jespersen 説と, Sievers 等の ‘pressure’ 説をあげている。Sievers では音節を ‘sonority syllable’ と ‘expiratory (pressure) syllable’ の二つに分け, 後者は「胸はく」 *chest pulse* の結果として起る ‘renewed breath pulse’ あるいは, ‘expiation’ より始まると考える。「きこえ」だけでは音節の *boundary* は決定できず, *breath pulse* のみが第2音節の始まりを示し得る。*an aim* と *a name* の区別もこの *pulse* によって識別し得るとする。さらに R. H. Stetson の実験記録を引き, *copy* [kóp-i] *upon* [ə-pón] の場合, 第2音節が p の前, 中, 後のどこから起るかの問題は ‘speed of utterance’ すなわち, 第2音節の運動に運びこもうとする ‘increase of speed’ によるとして, 音節は ‘chest pulse’ および場合によっては, *chest muscles* の ‘a single movement’ (“stroke”) によって境界線を引かれるという。

結果的にいって, *sonority* 説は音節の山, あるいは核 *nucleus* を決定し, *pulse* 説は音節の境界線を決定することになる。とはいえ, どの単独の解釈をもってしても, すべての *varieties* を十分説明しつくすことは出来ないように思える。

次に2音節以上の語で問題となるのは, *syllabic* 特に *consonant syllabic* である。英語本来語の2音節語820語を抽出して, 明らかに目立ったのは *after, better, daughter, father, mother, over, shower, under, water* 等の ‘-er’ 語尾語と, *idle, ramble, little, spangle, rimple, rustle, shuffle*, 等の [l] であった。

‘-er’語尾語	152語	18.7%
<i>syllabic consonant</i> /l/	122語	15.0%
計	274語	33.7% ¹⁾

- 1) この比率は Skeat の同辞典でこれに数倍する語いをもつラテン系その他の借用語から抽出した /l/ *syllabic* が *able, people, gentle, simple, table, nncle*, 等約90語にすぎなかったのと対照的である。

Jespersen (*MEG*, pt.1, p.270) によると、種々の弱母音 + r の結果として見出される syllabic/r/ は語尾または子音の前では /ə/ となり、母音の前では /æ/ となった。この syllabic/r/ は多くの場合、母音の消失によって起ったにちがいない。¹⁾

Pike (*Phonemics*, p.45) では syllabic/m/ /n/ /l/ の他に /r/ が含まれ、*butter*/batr/ *bird*/brd/ をあげている。²⁾

Bloomfield (*Language*, p.121f) は syllabic を 'a crest of sonority' とし、syllabic としてのみ現れるものが母音、そして子音のうち non-syllabic のみのものを mute、両方が起るものを sonant として米語の /r/ をあげている。すなわち、*red*/red/ の /r/ は non-syllabic であるが、*bird*/brd/ の /r/ は成音的であるとしている。この区別は phonemic difference を作る場合があり、次の contrast を生じる。

<i>stirring</i> /strɪŋ/	<i>pattern</i> /pétɾn/
<i>string</i> /strɪŋ/	<i>patron</i> /péjɾn/

はては *error*/érr/、*stirrer*/étrr/ という形も可能で、syllabic 記号も示差的特徴となり彼は「第二音素」としてあげている。³⁾

子音の成節主音としてあげられるのは /l/, /m/, /n/ でその他は上記の /r/, まれに /ŋ/ である。⁴⁾ この成節主音化が起るのは第一には CVC₁C₂ の場合、C₁C₂ が homorganic な場合で C₂ に対して発音器官が C₁ を発する前、あるいは同時に位置をとる。従って母音を形成する voiced breath の自由な通

1) *MEG* には Hart, 1570 からの例として、/daughtr, evr, fa'ðr, tšildrn, ba'br/ などがあげられている。

2) Jones (*Phoneme*, §203) は *burn*, *work*, をあげ、[bœrn][wœk]あるいは[brn][wɜk] と発音する場合があるが、これは英国の西部、北西部と米語であり、米語の場合は前者と音質はやや異なるとしている。

3) Pike (*Phonemics*, p.45) でも音素記号の Tentative Alphabet の中に /m/ /n/ /l/ の他に /r/ をあげている。

4) Kenyon (*Dictionary*, xxi) に I can go. /aikŋgo/ あるいは making/mekŋ/ があがっているが colloquial である。

過の間隔がなくなる (*baffle, paddle, cotton*)。第二は C_1C_2 に異なった器官が用いられる場合であるが (*apple, tackle, single*), C_2 が C_1 を発して後に位置をとったとしても, C_2 への推移が極めて早いか, 母音のための開き *aperture* が狭すぎるため, 子音の「わたり」のみが介入する (cf. *lesson*)。第三は C_1 が *open or fricative* の場合で C_2 との接触に子音の「わたり」音が介入する (*whistle, puzzle, prism*)。この場合は母音を作るための開きが比較的容易なため, ごく短い母音を介在させることもできる (*poison, blossom, prism*)。¹⁾

以上は成節子音成立の条件, あるいは原因についてであるが, そこでこれから成節子音の *prominence* の問題が起る。Jones (*phoneme*, §439) は子音成節化の原因となる *prominence* は「長さ」によって生ずるとして,

meddler /¹medlə/ : *medlar* /¹medlə/

coddling /¹kodliŋ/ : *codling* /¹kodliŋ/

をあげ, /¹l/ /¹n/ は *stress* は弱い, [l] [n] よりもはるかに長く伸ばされることによって音節として聴覚を打つだけの *prominence* を与えられると説く。

これに対し, Bloomfield (*Language*, p.122) は 'a slight increase of stress' によって本来「きこえ」の十分でない *sonant* に一時的により大きな *prominence* を生じ成音節化すると述べている。

両者とも *prominence* によって成音節化を立証する点は共通であるが, 一方は「長さ」を一方は「強さ」をその条件としている。子音の「長さ」は認めるとしても, 長くされた /l/ と /əl/ の *prominence* の差はどうであるか, また, *puzzle* のような場合はむしろ /z/ の方が /l/ より *prominence* の高い

1) 以上は主として Webster の「発音の手引き」によったが, Kenyon (*Dictionary*, xxi) は成節主音と 'schwa vowel' ə + non-syllabic consonant の交替について詳細な例示を与えている。(例. *button* /¹bʌtn/ /¹bʌtən/ ただし, 前者の方が prevalent)

のではないかというような疑問が生ずる。¹⁾

前記の Kruisinga(*Handbook*, §134) では /l/ /m/ /r/ の「きこえ」の度合いを比較し、これらに母音/a/をつけ、*alm*, *aml*, *arm*, *amr*, *alr* *arl* と組合せ、例えば *alm* では /l/ から /m/ へ移る間により *sonorous* な音がないので一音節の ‘impression’ をうける。*aml* ではその反対に ‘necessarily’ に 2 音節で発音しているように思える。すなわち、「きこえ」の度合いから /r/ > /l/ > /m/ という順になり、音素配列によって成音節と非成音節の差を生ずると説いている。彼のグラフを見れば、一見明瞭なようであるが²⁾、上の説明はあいまいさが感じられる。

英語の場合、*frequency* の高い本来語で特に成節子音が多いということは、英語の音組織をいっそう複雑にしている。

4

以上われわれは音節というものを一応 *speech* の最小単位と設定して、いろいろな角度からその音構造をさぐって来た。その間いくつかの問題点、困難点を指摘するに止まり、音節とは何かの決定的な解明を果せなかった。この小論はその意味でほんの出発点に立ったばかりであるが、最後にわれわれの最終目標である英語の *stress-timed rhythm* を指向しておいて、逆にならぬ中で音節の位置を求めてみることにしたい。

Kruisinga(*Handbook*, §131) は、音節が ‘the most natural division of speech’ であり、われわれの耳が ‘naturally’ に文を分ける音連続であるという。Webster でも個々の *speech sound* は自国語においても認知が困難

1) Jones (*Phoneme*, §439) はさらに日本語の *sampo*, *simbun*, *de¹gki*, *on¹ma* をあげているが、彼も認めているようにわれわれには非成節子音と大して相違は感じられない。

2) 本稿 p.177 参照。なおこのグラフの例、*zalm* から、英語の *film* と *prism* の相異が証明できる。

であるが、音節はよりはっきりと知覚され受容される単位で、音節に対する「感じ」は ‘universal’ である。外国語の場合われわれが識別するのは個々の音でもなければ語、句、あるいは文でもなく音節であるとする。

しかしながら、実際の話しことばの流れにおいては、例えば、

He can understand them, /hɪkənərstænəm/

I should have thought so. /aɪʃtʰʊtso/

や、さらにはまた、

The doctor's not a very good surgeon.

Her pencil is on the table also.

などのリズム中での音節は外国人にとっては、‘the most natural division of speech’ とだけでは把握しがたい部分が多すぎる。

もちろん前に述べたように Jones も prominence は相対的なものであり強さ、長さ、音調と「きこえ」の総合体であると認めているので、個々の音節に同じ timing をおけばスペイン語のような ‘staccato-rhythm’¹⁾ になる。

Hockett (*Linguistics*, p. 52f) は英語のリズムの特色を ‘stress-timed rhythm’ であるとして、‘one primary-stressed syllable’ から次のそれへ移る場合に、その間に音節がないときも、あるいは反対に多くの音節がある場合も、ほぼ同じ時間の長さで話される。もしその間に音節がなければ、その間発話のスピードを少しゆるめ、多くの音節が介在する場合は早く、‘squeeze’ するとして次の例をあげている。

²*The | wind | bléw up the |³street¹ ↑*

Pike (*Intonation*, p. 34f) も ‘rhythm unit’ というものを設定して、英語は長短の休止や抑揚をもちながら、‘burst of speed’ で話され、‘a single

1) Pike (*Intonation*, p.35). 日本語もその典型である。「英語教育」18巻7号(大修館, 1969)で石川衛三氏が英語のリズムを<打ち寄せる波>にたとえるならば、日本語リズムは<その沖を航行するポンポン蒸気船>と表現しておられるのは当を得て興味深い。

rush of syllables uninterrupted by a pause' で発せられる文、または文の一部が rhythm unit であるとして、次の例を示している。

single rhythm unit

the car

intonation

a jam'ping jack

here it is

he said he will

two rhythm units

I want to go but I can't.

If he comes he'll buy it.

Every day is Pepsodent day.

そしてただ一つの 'primary contour' を含むリズム単位が 'simple rhythm unit' である。

the uni'versity
3- °2- -4//

'Robert must do it.
°2- -4//

The 'manager is the one who purchase it.
4- °2- -4//

Pike は rhythm unit のタイミングは連続は英語の音韻構造の極めて重要な特色であると力説し、Hockett の場合と同様、次の二文は音節数の相異にかかわらず、だいたい同じ時間で話されるとする。

The 'teacher is 'interested in 'buying some 'books.

'Big 'battles are 'fought 'daily.

このように英語は 'uniform spacing of stresses' の傾向を生じる。

The 'man's 'here.
3- °2-4-3 | °2-4//

The 'manager's 'here.
3- °2 -4 -3 | °2 -4//

If 'Tom will 'I will.
 3- °2- -4-3 | °2- -4//

If 'Tom'll do it 'I will.
 3- °2- -4- -3 | °2- -4//

結局英語のリズムは音節の数ではなくて、"one strong stress" の存在によって決まり、これが 'stress-timed rhythm' unit を構成するということになる。

言語は本来話し言葉であり、ことばは常に生きているものである。身体の一部を切り離して、これが人間であると言い得ないように、音節を分拆することによって、これが speech の単位であると言い切ることができないようである。たしかに英語のリズムである、

The doctor's not a very good surgeon.

のパタンの山には prominence をもった音節が来ることは認め得るが、われわれにとって、最も困難であるのはむしろその底辺部である。音節の問題がその peak よりも境界部であったように、speech における 'rhythm unit' を結ぶ基線部こそ、われわれにとって最も問題となる部分である。

以上われわれは主として英語本来語について、(1) 音節というものを一応 speech の最小単位と設定し、(2) 音素とその配列によって音節構成を、(3) 「きこえ」あるいは prominence を尺度として C V C という英語音節の核を、(4) 「胸はく」という尺度から CVCVC の境界線を求め、(5) /l/ /m/ /n/ /ŋ/ /r/ について成節子音の必然性をさぐろうとした。そしてそれらの総括が英語のリズムの基調となることを前提した。

音節の総和が英語のリズムを形成しているという単純な方程式は成立しない。ことばというものは生命をもったものであり、切ることをできない力動の流れである。とくに音節リズムを自国語とするわれわれが stress に極めて敏感な英語に対するとき、まず第一にこの強勢リズムになれることが必要である。同時に重要なことは音節の場合と同様に弱音部のタイミングという

ものを無視してはならない。

冒頭に引用した Sapir の警告とともに、生きたことばのもつ音韻精神、あるいは「内的音組織」¹⁾ といったものの存在が重要な意義をもってくるように考えられるのである。

参 考 書 目

末尾の () 内は本文中に使用した略号

- Bloomfield, L. *Language*. George Allen, London, 1933.
- Fries, C. C. *Teaching & Learning English as a Foreign Language*. Ann Arbor, Michigan, 1945. (*Teaching*)
- Hockett, C. F. *A Manual of Phonology*. Waverley, Baltimore, 1955. (*Phonology*)
- Jespersen, O. *A Modern English Grammar*. Vol. 1. George Allen, London, 1965 (reprinted) (*MEG*)
- Jones, D. *An Outline of English Phonetics*. 9th ed. Heffner, Cambridge, 1960. (*Outline*)
- *The Phoneme : Its Nature and Use*. 2nd ed. Heffner, Cambridge, 1962. (*Phoneme*)
- Kruisinga, E. *A Handbook of Present-Day English*. I, 4th ed. Kemink en Zoon, Utrecht, 1925. (*Handbook*)
- Pike, K. L. *Phonemics*. Ann Arbor, Michigan, 1947.
- *The Intonation of American English*. Ann Arbor, Michigan, 1945. (*Intonation*)
- Sapir, E. *Language*. Harcourt, Brace, N.Y., 1921.
- Saussure, F. de. *Course in General Linguistics*. Peter Owen, London, 1960. (*Linguistics*)
- Sweet, H. *A New English Grammar*. Pt. I. Clarendon, Oxford, 1891. (*Grammar*)
- 太田 朗 「米語音素論」研究社1969.
- 小栗敬三 「英語音声学概論」篠崎書林1962.
- 「英語音声学」篠崎書林1969.

1) 'inner sound system' See Sapir, *Language*, p.45

- Jones, D. *Everyman's English Pronouncing Dictionary*. 13th ed. Dent, London, 1967. (*Dictionary*)
- Kenyon & Knott. *A Pronouncing Dictionary of American English*. Merrian, Springfield, 1953. (*Dictionary*)
- Skeat, W. W. *A Concise Etymological Dictionary of the English Language*. Clarendon, Oxford, 1882. (*Etymology*)
- Webster's New International Dictionary of the English Language*. 2nd ed. "A Guide to Pronunciation." Merrian, Springfield, 1952. (Webster)
- 市河三喜編 「英語学辞典」研究社 1965 (17刷)